

【芸術学部 芸術学科】

総合領域
イラストレーション領域
美術領域
情報デザイン領域
空間デザイン領域
地域実践領域



携帯・スマートフォンの方は
こちらのQRコードから
アクセスしてください。

【地域実践領域 制作メンバー】

デザイン:浅野崇(写真クラス卒業生)
編集:取材:西川有紀(モータ)
イラスト:すずきあい(niwa/印刷クラス卒業生)
テキスト:加藤賢治・石川亮(地域実践領域 教員)
印刷:大神社
発行:成安造形大学 入学広報センター
発行日:2020年4月1日
〒520-0248 滋賀県大津市御木の里東 4-3-1
Tel: 077 574 2119 Fax: 077 574 2120
E-mail: nyushi@seian.ac.jp URL: www.seian.ac.jp

本冊からの無断転載を禁じます。
また掲載内容は、2020年度3月現在のものです。一部変更される場合があります。
なお、最新情報については本Webサイトをご覧ください。

OPEN CAMPUS 2020

1st 6/7[日] 2st 7/26[日]

【ACCESS】

京都から20分	JR湖西線普通	JR おと 温泉 駅
大阪から46分	JR京都線新快速・JR湖西線普通	
神戸から65分	JR神戸線新快速・JR京都線新快速・JR湖西線普通	
駅前からは無料のスクールバスで約3分		

【 】
成安造形大学

地域実践領域

クリエイティブ・スタディーズコース

CREATIVE COMMUNITY DEPARTMENT

CREATIVE STUDIES COURSE

成安造形大学
大学案内2021

SEIAN UNIVERSITY OF
ART AND DESIGN
GUIDE BOOK 2021

地域実践領域で学びたいポイント PICK UP

● ポイント1 芸大らしい魅力的なカリキュラム

地域で実践されているまちづくりをプロジェクト形式で実際に体験。
フィールドワークや創造力を養う授業を通して、これからの社会に貢献できる技能や
知識が身につくと考えています。また、芸大ならではの環境で刺激を受けながら、
さまざまな分野の学生たちと楽しく学ぶことができます。

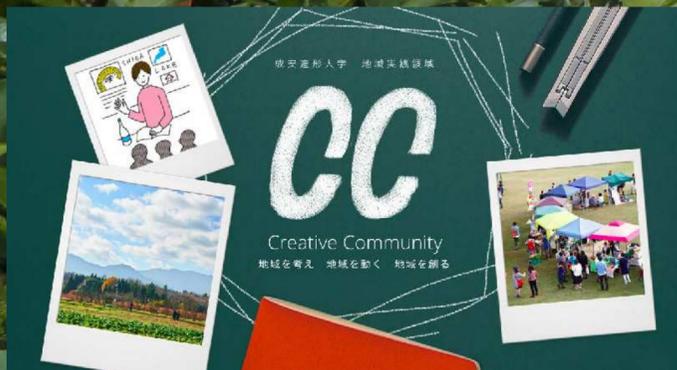
● ポイント2 安心して4年間を学べる学費

入学時に必要な費用や卒業までにかかる学費を他領域と比べて低く設定して
いますので、4年間安心して学べます。

	前期(入学時)	後期	年間計
入学金(入学時のみ)	200,000円	—	200,000円
授業料	450,000円	450,000円	900,000円
教育充実費	31,250円	31,250円	62,500円
その他諸経費(入学時)	41,660円	—	41,660円
合計	722,910円	481,250円	1,204,160円

● ポイント3 就職に強い充実したキャリアサポート

本学では少人数教育による、きめ細やかな個別指導を大切にしています。この領
域は、これまでの学問領域の壁を超えた新しい教育と研究の場です。体験的な学
びを重ね、様々な視点で地域の魅力を広く発信できる力を養うため、地域の活性
化を目指す企業や各種団体などへの就職活動が有利になると考えています。



地域実践領域の活動をみることができる領域運営サイトです

写真:(有)BlueberryFields 紀伊國屋「安曇川泰山寺 ソラノネ 紀伊國屋」にて

地域が、
教室に
なる。



地域という教室で 「考える」 「動く」 「創造する」

地域のキーパーソンとして
創造的提案ができる人材を育成します。

人口減少社会を控え、未来の持続可能な日本社会を考えると、地域の活性化が大切な要素として浮かび上がってきます。地域に根ざす成安造形大学は、アーティストやデザイナーを輩出するのみならず、「地域」からの視点で芸術を捉え直し、質の高い働き手の供給により、地域全体のクリエイティビティ(創造力)の向上に寄与すべきであると考えます。

2018年4月からスタートした地域実践領域クリエイティブ・スタディーズコースでは、これまで本学が培ってきた近江学研究や地域連携事業をベースとしながら、芸術教育の特質を活かして、より具体的な方法で学生が地域に入り込み、現場で活躍する人が教員となって学生を育むシステムを構築。地域経済、環境、観光、歴史文化、伝統文化、食、各種素材、商品開発、農林水産業、福祉、まちづくり、地域行政など、横断的な学びのフィールドが広がっています。自分の仕事や人生について能動的に考え、自己の資質を向上させ、社会的・職業的な自立を目指すために必要な能力を育成します。



滋賀県の環境と 特質を活かした 地域実践領域の アクティブラーニング

この領域は、地域というフィールドを最大限に活かし、楽しみながらアクティブに活動することが基本です。PBL(プロジェクト等に基づく実践学習)を通し、デザインや美術を専攻する他の領域の学生たちと交わることによって、クリエイティブな感性や発想力を獲得。同時に滋賀県内で活躍する招聘教員や、キャリアサポート担当教員の関わりの中で、長期にわたる就業実践を体験します。

1. 創造的感性(クリエイティビティ)の構築

造形やデザインを志す学生と同じ環境で学ぶことで、面白いことや新鮮なこと、不思議なこと、思いもよらなかったことに気付く、独自の感性が育まれていきます。実社会の現場で様々な「モノ、コト」と出会い、敏感に反応し、判断できる感覚を身につけます。



2. 独自のインターンシップ

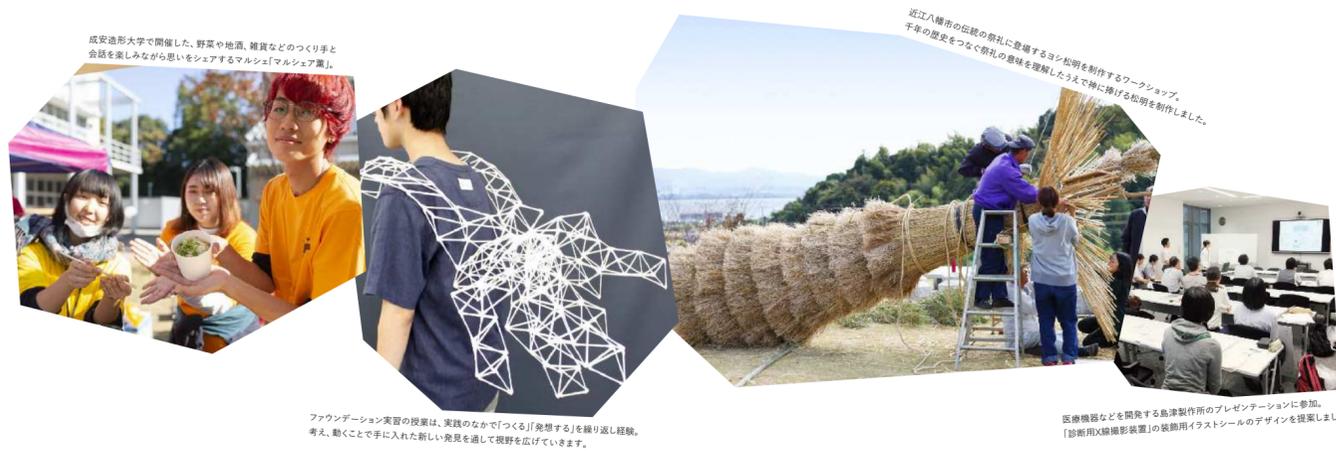
地域実践領域では地域の様々な企業と連携し独自のインターンシップに取り組む予定です。地域の魅力や独自性を活かした仕事、高齢社会を想定した思考、持続可能な社会とは何かなど、大学と企業がこれから訪れる社会を予測し、未来社会を指標においた実践授業を計画しています。



3. 地域実践フィールドワーク

フィールドに出て現場でしか味わえないリアリティを体験。足を運ぶ地域のことを事前に調べて課題を予測し、イメージを膨らませることで、地域が抱える問題を的確に捉えることができます。得た情報は資料や文献と照らし合わせ、問題点や本質にアプローチしていきます。





地域実践領域の4年間の学びの流れ

フィールドワークと並行しながら、地域実践に関連する複合的な講義や演習科目で知識と技術を高め、創造できる人材を育むプログラム。就職活動に役立つキャリア育成も万全です。※2017年3月時点で計画している授業です。実際には異なる場合があります。

授業項目	1年次	2年次	3年次	4年次 前期	4年次 後期
講義系授業 地域・社会を理解する授業。身近な地域社会をモデルに、社会の仕組みや全体像へと理解を深めます。	地域観察 地域の地理、地誌、歴史文化の背景を学びます。地域の特性や社会環境を理解し、未来社会の暮らしのあり方について探求することで、地域実践を学ぶ意義を掴みます。	地域分析 地域の観察からそこにある問題を発見し、それをトータルに理解する方法を学びます。地域社会の現状やこれまでの推移を分析し、その特徴・課題を正確に認識するための手法を身につけます。	地域活動 自然災害や高齢化社会に直面し、安心して暮らせる新しい社会のあり方が問われています。滋賀県で新たな価値観を創造する企業家や研究者を招聘教員に迎え、実践感覚に触れながら、創造する過程を学びます。	地域創造 社会は様々な「コト」や「モノ」が関係しあって成立しています。領域を横断しながら情報を多角的・多面的に精査し、構造的に捉える能力を養います。	卒業研究 1 地域・社会を理解する授業とクリエイティビティ（創造力）を養う授業から組み立てられた自身のテーマを構築し、研究内容を決定していきます。
演習系授業 クリエイティビティ（創造力）を養う授業。新しい「コト」や「モノ」を生み出す力を、実践のなかで磨いていきます。	コンピュータスキル（制作） 自身の考えや思いを文章化するとき、データや統計を図やグラフ化するときに必要な基礎的なコンピュータスキルを習得します。プレゼンテーションの資料作成時に役立つ素材の探し方・選び方、簡単な写真編集の方法も学びます。	プレゼンテーション（発表・発信） 自分で考えた企画を誰かに伝えるとき、聞く相手、人数、場所によって、伝え方を変える必要があります。プレゼンテーションやテーマを変えながら繰り返し行うことで、アイデアや考えを聞く人に分かりやすく発表できるようになります。	ファシリテーション（促進・支援） 自分が中心となって地域の人や仲間を巻き込みながらプロジェクトを進めていくとき、自分の考えやアイデアへの理解を求めます。合意形成や相互理解をサポートし、協働を促進させる、キーパーソンに必要な素養を身につけます。	企画・編集（創造） 様々な関わりや関係が構築されると、プロジェクトを構造的に捉え直し、理解しやすくまとめることが必要です。または一つのストーリーに編集することが求められます。4年間の集大成として「コト」「モノ」をつくりあげるスキルが身につきます。	卒業研究 2 構築された自身のテーマに対してより良いアウトプット方法（論文、活動報告書、体験のまとめ、作品など）を考え、表現します。

身につく 地域実践の力

探す力 フィールドでの授業を通して様々な「コト」「モノ」に興味関心を持つことをきっかけに、気づき、課題発見、違いの見極め、自己探求、広げる感覚などを繰り返し経験し、探す力が身につきます。	聞く力 現状や事実の理解を深めるには、他者を認めて意見を聞く力が必要です。相手を知る、フォローアップ、共有、共感、協働、相手を敬うとは何かを、実践を通して学びます。	話す力 プレゼンテーションに関連する授業は、論点をつかむことに重きを置き、考えを整理して組立て、聞き手に分かりやすく順序立てて話す力を伸ばしていきます。
動く力 フィールドでの実践教育に失敗はつきものです。経験を積みこむことで、失敗を恐れず、自ら動く力を身につけ、一歩踏み出すことの大切さを学びます。	企てる力 地域の諸問題を解決するアイデアや自身の考えを実行するために求められるのが企てる力。イメージを文章化する、異なるものを組み合わせる工夫するなど、計画を実行する一連のプロセスを経験します。	創造する力 講義で得た知識と実習で培った技術を駆使し、フィールドで生まれたアイデアを創造できるようにします。目に見えるものだけでなく、モデルケースやコミュニティ構築も創造する一つの形です。
動かす力 企画を前進させるには、信頼関係を構築し、携わる人を動かす力が求められます。プロジェクトの授業を通して、連携、助け合い、任せなどリーダーとして牽引できる素養を育みます。	まとめる力 地域の諸問題に向き合うなかで記録したことを、絵や写真、文章を組み合わせ報告書にして提出します。経験した「コト」「モノ」を構造化して表現できる、まとめる力を身につけます。	創造する力 講義で得た知識と実習で培った技術を駆使し、フィールドで生まれたアイデアを創造できるようにします。目に見えるものだけでなく、モデルケースやコミュニティ構築も創造する一つの形です。

プロジェクト系授業
現場での経験値を増やし、多くの学びを得る授業。フィールドへ飛び出し、地域ならではの体験を通して学びます。

歴史・地域、デザイン、文化・芸術、教育・福祉、プロデュースをテーマに地域と連携しながら他の領域の学生と協働でプロジェクトを展開。現場で出会った「コト」「モノ」と向き合い、最終的には参加するプロジェクトの企画・立案を遂行。自らの表現が社会と対峙できているかを追求します。

[プロジェクトの進め方]

問題発見と探求 → 体験と対話 → 工夫と展開 → 社会・地域と連携

キャリア系授業
社会人として求められる基本的なスキルを身につけます。地域での体験や学びを通して、実社会に対して自分が果たす役割が何なのかを探求します。（※本学キャリアサポートセンター長が一人ひとりのキャリア実現を後押しします。）

[キャリア育成のステップ]

客観性と主体性（自分のポジショニング、自分のキャラクター） → 社会で求められる力（社会人基礎力、ジェネリックスキル） → インターンシップ（報告・連絡・相談、タスク管理） → アイデンティティの確立（自己実現、自立（自律）、自信）

地域実践領域スタッフのひとこと

フィールドワークは感覚を研ぎ澄ます時間、何でもないことに新たな可能性が眠っている。

失敗やつまづきなど、様々な経験をすることが実社会で役立つ。

伝え残されてきたものには理由がある。足元の地域社会を見つめ、未来社会を予測しよう！

なにげない日常が実は自分のオリジナリティーを作ってる！

石川亮先生 加藤賢治先生 濱中倫秀先生 松元悠助手



社会 ← と → 関わる 地域実践授業

講義系
授業



地元住民に向けてイベントプランを発表します。

現代社会の諸問題や 地域社会のあり方を 能動的に学ぶ

1年生の講義科目は、はじめに自分と社会がどのようにつながっているのかということを理解し、そのうえで人口減少や高齢化社会、環境問題、経済優先社会の弊害などの現代社会の諸問題を考えます。そして、国連が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)について学び、自らも2030年の理想の自分を想像します。後期には、地域を観察するというテーマで質的アプローチとして民俗学を学び、地域に残る俗信やハレとケ、食文化などに触れ、地域社会の未来を予測します。授業は、一方的な講義だけでなく、グループワークやディスカッション、フィールドワークも含め能動的な学びが実践されています。



SDGsの目標を目指したプランニングに取り組む様子。



和木ふるさとカルタ



納豆もち

学びとつながる

近江特産品トリビア《暮らし編》

近江に古くから伝わる身近な「コト」「モノ」に目を向けると、豊かな暮らしのあり方が見えてきます。



淡水真珠

1980年代に最盛期を迎えた琵琶湖の淡水真珠養殖は、数人の志士熱誠と淡水真珠を販売する神保真珠商店の店主によって受け継がれてきました。淡水真珠は、自然が作り出す「つとない色や形が魅力です。15年からスタートした事業では、

和ろうそく

高島市にある1914年創業の和ろうそく製造販売の老舗「大興(だいこう)」は、仏事ももちろん、茶事など暮らしの中で使われる和ろうそくを提案しています。附属近江大学研究所の講演会では、「大興」の3代目大西明弘氏、4代目巧氏をお迎えし、次の100年を展望した暮らしにデザインする和ろうそくの可能性や取り組みを語っていただきました。

桶・指物

木工芸で人間国宝に指定された父をもつ職人の中川周士(中川本太)比良工務、中川氏は伝統の桶の技とクールなデザインを融合させ、従来の常識をよぶ、情熱とシャープな口縁の桶をつくり注目を集めています。附属近江大学研究所の講演会では、桶が伝える伝統のつくりから学ぶ、新しい暮らしのあり方や、新たな使用方法などをお話しいただきました。

産根伝燈

伝燈をつくる技術は武具をつくる技術から発展したとされています。産根伝燈も、武具師、細工師、漆の技術が活かされており、江戸時代から続くこの生業は、産根屋に継承されています。平和産業として今日受け継がれています。本学招聘教員の井上昌氏(株式会社井上)がその技術力の高さを活用し、様々なクラフトの開発やプランニングに携わっています。

琵琶湖の花火

打ち上げ花火の原動力は神に捧げるためという意味が込められています。戦国時代に発展した火祭の技術は、平穩な時代に夜宴を魚が美し、花火と姿を変えました。大津の瀬田唐櫃では、建部大社の祭礼として、今もお神に捧げる打ち上げ花火が夏の風物詩となっています。附属近江大学研究所の公開講座では、花火の伝承を支える火火師を通して、花火の歴史を学びました。



地元企業のアイデアコンテストで企画を発表。

キャリア系
授業

キャリア講義の「目的」 就職はゴールではない

大学で学んだ知識や経験を、自らが希望する進路先でどのように生かせるのか?そのことを深く考え、少しずつ明確にしていくことで自己肯定感の向上を目指しています。具体的には、1年生のキャリア講義「大学での学びの目標づくり」から始まり、2年生からは他領域のメンバーと一緒に、グループワーク形式で様々な問題解決に取り組みます。グループワークには地域の事業者をはじめ、様々な世代の講義サポーターと交流するので、広い視野や世代を超えたコミュニケーション力が自然と身に着きます。



さまざまな企業人と共にグループワークを実施。



1 | 探求

フィールドワークの舞台は滋賀県の特徴ある地域です。滋賀県(近江)は江戸時代、主要な街道が通っていることから宿場町が栄えました。変わりゆく今日の町並みと受け継がれる歴史文化を比較しながら新たな発見へと想像を膨らませていきます。また、水辺の暮らしを探索し、自然環境の在り様に目を向け、人と自然の関わりに少しずつ気づいていきます。



湖の水平線について思い込められてしまう。



地域への興味関心から 新たな気づきを提案します

2 | 表現

地域のお土産を開発する授業では、現場で出会った人に調査したことや収集した資料、写真を編集して発表しました。地域の特徴を活かすためには、予測を立てることや、違うモノコトを組み合わせるなど、工夫やチャレンジが必要です。誰かと相談しながら自分の考えを整理し、新しい視点で地域に光を当てていきます。



職人さんに制作依頼の交渉も学生が行います。

3 | 振り返り

発表後は、今すぐ取り始める修正やリベンジプレゼンも試みています。それは自身が調べたことや経験したことについて、計画的に発表、表現できたか、テーマが構築できたかなど、できていない部分を自覚するためです。自身の新しい発見から可能性や手応えを獲得していくことも大事ですが、理解できていないことを把握することも大切です。



いろんな方向から考えるという
行為が大切。

これから社会に出て行く若者には、じっくりモノを考えて欲しいと思います。既成の事柄を鵜呑みにするのではなく、多角的にモノを見て、考える癖をつけて欲しいのです。答えが出てくるかは別として、いろんな方向から考えるという行為が大切だと思います。



—地域とつながるキーパーソン—

八杉 淳 (草津市立草津街道交流館 館長)

近世の街道と地域文化史研究の第一人者。江戸時代の地方都市に生まれた知恵を今の時代に伝えるため、古き良き時代の伝播者として多方面で活躍。



地域伝承の聞き取りをする様子。



町屋オフィスにて打ち合わせ。



探していた桜の木を発見!



地域で集めた情報とその魅力をプレゼンテーションします。



お土産作品のためのイメージスケッチ。



お土産課題の完成作品。「海津の桜」で有名な桜の木を使用して箸を制作、手製の精染めのランチョンシートで提案「海津春秋箸」。



資料作成の最終チェック。



町やオフィスにて意見交換。

Student's Column 1

僕と私と地域 フィールドワークの話

和田百合香(地域実践領域1年)



自分が受けた感動をお土産にして伝える!

私の出身地は、滋賀県東近江市の五個荘です。地域実践領域を選んだ理由は、里山などの自然環境や生き物に興味があり、1年生からフィールドに出て実践的な学びができて知ったからです。実際に授業では大学近くの仰木集落や、JR大津駅付近の中心市街地、自然環境に恵まれた高島市の針江や海津など、様々なフィールドに出て学びます。その中でも最も印象に残っているフィールドが滋賀県北部に位置する海津です。旧街道の路地から眺められる琵琶湖は目を奪われるほどの美しさ。かつては琵琶湖の水運を利用した生業が発展し、多くの人で賑わっていたという水辺の暮らしにも興味を惹かれました。後期の授業で地域の素材を使ったお土産を提案するという最終課題が出たのですが、私は海津を想定して

万華鏡を提案しました。海津の景色を見たときに、湖面にはさざ波が立ち、空を見上げると渡り鳥が飛び交い、湖岸の木々が風に揺れている景色は、万華鏡を覗いたときのように常に移り変わっていると感じたのです。そして万華鏡の中を美しく変化させる素材として、私が大好きなエビ豆という郷土料理(紙粘土で制作)と、海津の湖岸に打ち上げられたシーグラスを使うことに。万華鏡の側面には私が撮影した海津から見える琵琶湖の湖岸と湖面に山並みが映る写真を貼りました。海津にある素材を使い、移り変わる美しい景色を表現したお土産を提案できたのではないかと考えています。これからもフィールドで能動的に学び、将来は滋賀県の自然や歴史文化を守り、伝えていく仕事に就きたいと思っています。



海津の流動的な景色を感じることが万華鏡。

社会と関わる 地域実践授業



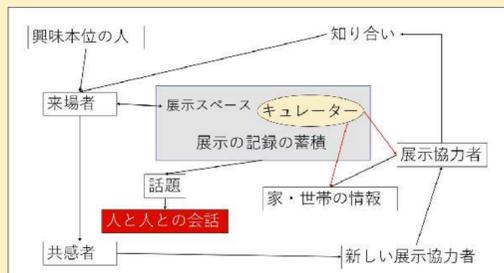
講義では、地域に存在する様々なデータ(数値)に着目し、市町村程度の特定の地域を、データと社会の関係性を含め広い視野でとらえることを学びます。特定の地域の人口、男女別、年齢層、各種産業の就業割合などからその地域の特徴を他と比較。客観的なデータをもとに地域を分析すると、他者に説得力を持って説明することができるからです。その上で、地域産業や活動する人々のつながり、そして関係性を学びます。例えば、山間地域の人口減少や高齢化という課題を解決するために、林業など一つの産業の活性化のみの対応では不十分です。交通インフラの整備や、農業との連動、新商品の開発、販売などの産業とのつながりも含めて総合的に検討する必要があります。



システム思考を身につける



演習では、講義で学んだ理論を特定の地域を想定し、データをもとにして実際に分析します。そのために、WEB上のごく客観的なデータ(数値)を取り出すのか、取り出したデータをどのように適切なグラフに置き換えて見える化するのかを学びます。また、社会の関係性については、例えば「風が吹けば桶屋が儲かる」という「ことわざ」をもとに、風が吹くことで巻き起こる様々な事象から、最終的に桶屋が儲かるという連関図を、ディスカッションしながら図化するトレーニングを行います。最終課題では、特定の地域が幸せになるような提案を、データと関係図を使って他者にわかりやすく説得力を持って解説(発表)します。



(注釈)「滋賀県の地域課題をシステム思考で解決する」プレゼン発表の資料

Student's Column 2

僕と私と地域 流木ティビづくりの話

佐野泰平(地域実践領域2年)



「まずは挑戦！」協力しあってコトが実現していく

僕は大学の近くの滋賀県大津市出身です。漠然と「地域で何か役立つことがしたい」と考えていたところ、高校の先生に新しく芸術学部ができる分野として地域実践領域をすすめられて受験しました。正直、美術の訓練や準備をほとんどしなかった僕に何が出来るのだろうか?と1年生の時はとても不安でした。ある日、授業でつくった立体作品を並べて合評する時間がありました。みんなの作品を見ながら面白いと思った作品に付箋を貼り、コメントを書き残していくのですが、他の人の作品を一通りみて自分の作品の前に帰ってきた時、たくさん付箋が貼ってありました。一瞬目を疑いましたが、すごく嬉しかったのを覚えています。2年生の授業では、実際に琵琶湖とダム

湖に流木を拾いに行き、みんなで小さな休憩所をつくることに挑戦。曲がった木は味があって格好いいのですが、思うようにいきません。さらには、接合は釘やボルトを使わずに直接小さな穴をあけ、ダボをうって止める方法を採用しました。しかし、それだけではきしきしと折れてしまうので、接合部にシュロ縄を巻いて補強。全て自然素材でつくった休憩所はマルシェイベントで琵琶湖を望める場所に組み立てました。休憩所でゆっくり休んでくれている人を見たときはすごく嬉しかったです。僕は制作を通して、みんなで協力しないと何かをつくり上げることはできないことに気づきました。まだまだわからないことだらけですが、先ず一生懸命やってみることが大事ということです!



1 | 体験と創造

「地域の素材でつくる。」では素材に触れる、感じるなどといった体験から始まります。それはモノやコト以外に様々な可能性が考えられるからです。例えば琵琶湖とその流域に漂着しているたくさんの流木がどこから来てどこへ行くのか?流木が形を変えてオブジェや空間演出に様変わりすることで、様々な人の目に写り、手に触れ、関係が生まれるという新たな価値を産み出すかもしれません。



地域の素材でつくる サステナブルデザイン

2 | 工夫と挑戦

素材を扱うにはその特性を知ることが大切です。自身が思い浮かべた形やイメージに近づけるには技術と環境設定が重要ですが、全てが揃っているとは限りません。今の自分のできることや友だちと協力して取り組めることから始まります。それはセオリーやロジック(論理や道筋)に頼るだけでは難しく、あれこれ工夫することや失敗を恐れず挑戦することが解決の糸口へ導いていけると考えています。



3 | 予測と展開

「サステナブルデザイン」では持続可能な社会を目指すには何が必要か、予測することが問われています。過去から現在の経験による成功や失敗を冷静に見つめ、問題に対して必要なデータを収集する、読み解くなど新たな解釈をすることが要求されます。提案するアイデアは一部の誰かが得ることや、優位に立つことではなく、誰と関係するか、どのように展開するかが重要です。



社会と関わる 地域実践授業



里山フィールドワーク

自然と人間が支え合い
持続する社会を考える。

このプロジェクト授業では、人と自然の関わりと環境問題について調査しています。人間は自然の恵みやあやかりながらも、たびたびその驚異に脅かされてきました。湖と山に挟まれた場所で暮らす滋賀県の人々は、自然との関係を敏感に感じ取り、生活領域と自然とが自然とつながっている感覚を持っています。雑木林に入って植物や昆虫の観察を行い、循環する環境を目にすると、自然と人間が支え合って持続する社会をつくるヒントが見えてきます。



森を守るための植樹作業。

地域は宝物が満載です。

私は今、農村の未来のあり方を考えていますが、ローカルな場所からじっくりと考えることが必要だと思います。まずは自分が生まれ育ったところをしっかりと見つけてほしい。その環境をじっくり眺めることで未来が見えてきます。虫の目でもいのでしょうか、地域には宝物がたくさんありますよ。

—地域とつながるキーパーソンの声—

今森光彦 (写真家)

滋賀県大津市出身。里山をテーマに作品を発表してきた。湖北と湖南で異なる気候である滋賀県の、自然と季節との関わりを的確に捉えた作品も多い。



プロジェクト系
授業



「健康な森林とは？」をテーマにした現地でのレクチャー。

プロジェクト系
授業



タウンミーティングにて私の行動宣言を発表。

滋賀の未来カード制作

未来社会のデザイン
デザインワークをとおして学ぶ、
「SDGs/ソサエティ5.0/滋賀県基本構想」

滋賀県企画調整課と「滋賀の未来カード制作」に現在取り組んでいます。これは滋賀県基本構想、2030年に向けたビジョン「変わる滋賀 続く幸せ」を基本理念に、自分らしい未来を描ける生き方と持続可能な滋賀の実現を目指すものです。これをわかりやすく、面白く取り組むことができるツールとしてカードゲームを開発。タウンミーティングやファミリーセッション講座に参加し内容への理解を深め、ゲーム性を高めるために様々なカード・ボードゲームの要素をヒントに進めています。滋賀の名産や歴史、人物をイメージに入れるなど工夫を凝らしながら、実験検証を繰り返し制作に取り組んでいます。



ボードゲームの提案。



提案中のカードゲーム



タウンミーティングのグループワークに参加。

開発したカードゲームの遊び方をレクチャーしました。



ちま吉センターにてちま吉グッズを販売。

プロジェクト系
授業

ちま吉プロジェクト

キャラクターを活かした
まちづくりの実践

2007年に成安造形大学の学生が生み出したキャラクター「ちま吉」(NPO法人大津祭曳山連盟公式キャラクター)を活用して、大津祭の広報企画や商品開発に取り組んでいます。国重要無形民俗文化財に指定される大津祭は400年という歴史を持つ伝統的な祭礼です。近年は若手の参加者減少に伴い、盛り上がり欠けという課題があります。学生たちは、祭りを運営する連盟の方や商工会議所の担当者らと対話をしながら、祭り当日に企画進行や開発商品の販売を行うなど、課題解決に挑み祭りを盛り上げています。今では多くの「ちま吉」ファンがお祭りに訪れるようになりました。



QRコードで読み取られるイラストデザイン。



参加イベントのモザイクアートを実施。



大人気のちま吉くん。

大学は「分かち合える心」を
育む場所。

これまでの社会は、文明と経済がつくりあげたモノの豊かさや幸せの価値があった時代と言えるでしょう。経済力で得た富で全てを自分のものにすることは、本当に幸せでしょうか。大事なことはそれを分け合う仲間がいること。その意味や価値を共有する心を持つことが、本当の豊かさだと思います。

—地域とつながるキーパーソンの声—

岩田康子

(ブルーベリーフィールズ紀伊園園 代表取締役)

湖西の山裾に無農薬のブルーベリー栽培を手掛けることから活動を継続している。食の安全、安心にいち早く気づき様々な取り組みを実践してきたことから多様な起業家に支持されている。

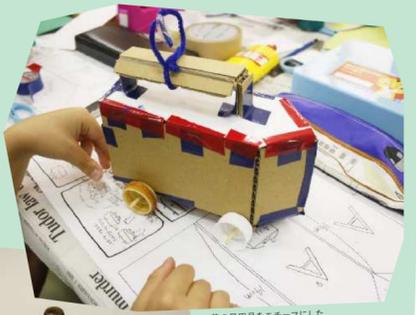


プロジェクト系
授業

博物館でワークショップ

対話から社会に隠れている
問題や価値に気づく。

本学は大津市歴史博物館など、滋賀県内の文化行政機関と連携して取り組むワークショップの開発、運営、サポートに関わっています。例えば、博物館の企画展示のテーマに合わせ、滋賀県で古くから受け継がれてきた伝統技術を学ぶ制作型ワークショップを実施。その他、地域住民と直接対話しながら地域活性や文化事業などを検討する、対話型ワークショップにも参加しています。制作や対話を様々な人と行うことで、コミュニケーション能力向上につながり、社会に隠れている問題や、価値に気づくことができます。



昔の日用品をモチーフにした「ゴ-!ゴ-!アイロンカー」



お揃いの帽子を着て自己紹介。

学びとつながる

近江特産品トリビア 《食文化編》

近江の食の豊かさに触れると、滋賀県のことがかもっと好きになる。もっと知りたくなる。



ブルーベリー

大津にあるブルーベリーフィールズ紀伊園は、湖西の山裾で無農薬のブルーベリー栽培を30年以上にわたって、その後継材を大切にしながら、安全安心なジャムづくりを展開し、安心安全なジャムづくりで様々なバイヤーから発注を受けています。本学内のカフェアールでも、切手を販売しています。

地酒

湖国・滋賀は美酒の宝庫であり、造り酒屋は50軒あります。中でも湖北水ノ本酒造は、地元農家の酒米と酒蔵に湧く水を使用し、本場の地酒造りにいそいでいます。多くの人に酒を愛してもらったため、未だ限定した販売方法でも有名です。本学招き酒の高田宗伸氏富田浩造氏本造氏が伝統と革新を合わせた製造と発信に日々取り組んでいます。

鮎寿司

滋賀県で古くから受け継がれてきた伝統料理の鮎寿司。各家の味が異なりますが、高島市マキノ町津津にお店を構える魚池で漁られた鮎寿司は2年熟成しています。地域で収穫される米と目の前の琵琶湖のミロロシで丁寧に漬け込まれた鮎の味は格別です。本学招き酒の左衛門氏が受け継がれてきた味を守りつつ、新しい食べ方を提案しています。

煎茶

お茶の由来は近江からという説もあるほどお茶の産地が深い滋賀県でも東近江市の政所(まんどころ)で栽培されるお茶は、谷間の狭い場所で行われ完全無農薬であることから幻の銘茶と呼ばれています。附属近江学研究所では茶農家と地域おしり協力隊で新たな展開を模する若手活動家を迎え、取り組みと展望をお話いただく講演会を開催しました。

パムクレーン

近江八幡市を拠点とする有名な和菓子老舗たねや。その洋菓子部門の「クラフティ」がつるパムクレーンなどはとも有名です。作り方を公開しながらも、その味は誰も真似できません。季節、お店、イベントに合わせた様々なパムクレーン人々を楽しませてくれます。本学卒業生が商品企画やパッケージデザインの仕事に携わっています。

Student's Column 3

僕と私と地域 曳山お町内巡りQRラリーの話

伊藤誠将(地域実践領域2年)



祭りをとおして町の魅力を知ってほしい!

私は滋賀県愛宕町で育ちました。もともと地域の伝承(妖怪伝説)や祭り、食文化など民俗的な要素を持つものに興味があり、成安造形大学のオープンキャンパスに参加した時に、地域実践領域ではフィールドワークを通じて、民俗的なことを学ぶことができると知り入学。2年生になると、社会とつながるプロジェクトを選択履修するのですが、私は「ちま吉プロジェクト」を選びました。この科目は「ちま吉」という成安造形大学の先輩が生み出したキャラクターを使ってイベント企画や商品化することで地域を元気にしようとするプロジェクトです。私が取り組んだのは、「QRラリー」という新しい企画。大津祭が行われる大津の中心市街地は、老舗の和菓子屋さんやおしゃれなカフェ、骨董品の販売など珍しいお店があり、魅力的な街だと思いました。大津のお店の魅力を多くの人に知って欲しいと思い、曳山やねり物を出す16のお町内に「QRコード」を掲出。各お町内に貼られた「QRコード」をスマートフォンで読み取ると、かわいいイラストが入手できる仕組みにし、祭り当日に集めたイラストの数によって景品をプレゼントしました。イラストは、このプロジェクトに参加していたイラストレーション領域の学生が描いたものです。結果、16箇所のすべてのお町内を回ったという人が70名を超え、予想を大きく上回り驚きました。もう少し協力者を増やせばより良いものが出来たと反省していますが、必ず次年度もこのプロジェクトを選び、企画をグレードアップしたいと思っています。



大津祭当日、ちま吉センターにてQRラリーの受付をする伊藤さん。

「大学と企業が一緒につくる」 共創型インターンシップ

長期にわたる企業との共創型インターンシップ

地域実践領域では、地域の様々な企業と連携し、3年次に独自のインターンシップに取り組みます。このインターンシップは、1年間に約4ヶ月間という長期間にわたって、実際の現場で仕事をします。地域の魅力や独自性を活かした仕事、高齢社会を想定した仕事、持続可能な社会における仕事など、未来社会を指標においたイノベーション事業を企業とともに取り組む実践型授業です。

ここが違う！ 地域実践インターンシップ

他大学にもある従来型の一般的なインターンシップ

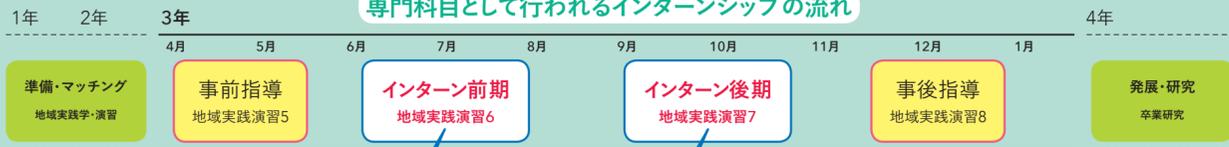
- ・ 4日間から1週間程度の短期間
- ・ 就業意識のアップや、社会生活を身近に体験
- ・ 短時間で可能な就業体験

地域実践インターンシップ

- ・ 1年次から4年次まで自分らしい仕事のあり方を追求できる
- ・ 約4ヶ月間にわたる長期インターン
- ・ 長期間だからこそできるイノベーション事業に携われる

- ゆっくり深める**
様々な仕事を体験しながら仕事の
本質をつかみます。
- じっくり関わる**
様々な人たちと関係性をつくり
共創する喜びをつかみます。
- しっかり働く**
様々な経験や関係性が自信となり
自分の仕事をつかみます。

専門科目として行われるインターンシップの流れ



インターン期間の1週間の流れ



週1回は教員と面談。独自に開発された実習ノートのチェックなど



実際に週2日間程度学外に出て企業で実習

インターン・実習の現場(施設)

インターン・実習の現場として、株式会社たねや、オプテックス株式会社、有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊国屋、琵琶湖汽船株式会社、総本山三井寺、彦根仏壇「株式会社井上」、富田酒造有限会社、「わさいな仰木」仰木地区活性化協議会、株式会社まちづくり大津、まちづくり会社まっせなど招聘教授が所属する企業や団体等を想定しています。



1 伝統を受け継ぐしごと
現場での学びは、地域の伝統に触れる機会がたくさんあります。伝統工芸品の作り手や、地産地消の生業に共感したあなたは、先人の思いを受け継ぐ担い手にふさわしい人材として、地域で活躍できるでしょう。

2 地域の生業を活かすしごと
地域を活性化するには、地域の情報を外へ発信していく必要があります。例えば、伝統産業を別のモノと組み合わせることでイノベーションすることで価値の転換が生まれ、販路の拡大に貢献することができます。

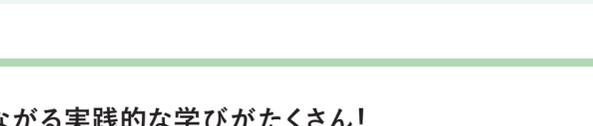
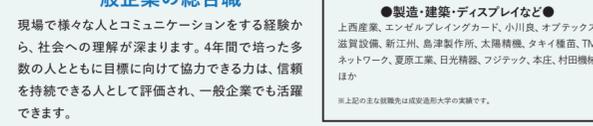
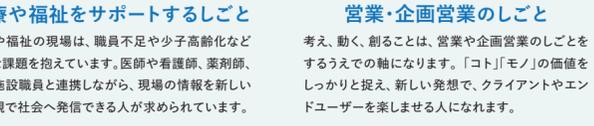
3 公務員や公共分野の職員
地域の基盤は、住民と社会の連携から生まれます。公務員、教職員、商工会議所職員、地域コーディネーターなど、知識とコミュニケーション能力を活かしながら、地域住民と社会をつなぐ役割も担えます。



4 地域の諸問題に取り組むしごと
地域に根ざしたNPO、まちづくり会社職員、地域おこし協力隊など、地域の現場では新しい価値観で拠点をつくれる人や、地域との連携を企てる人が求められています。



5 地域の魅力を発信するしごと
独立したコミュニティデザイナーになり、例えば、特産品をブランディングしてマルシェを企画することもできます。地域の魅力発信に貢献するやりがいはいっぱいあります。



資格課程講座

未来の社会をより良く行き抜くためのキャリアアップのために

皆さんが未来の社会をより良く生き抜くためのキャリアアップとして有料資格課程講座を充実していく予定です。

● 有料資格講座の例 ●

- マクロオフィススペシャリスト(MOS) 秘書検定
- 販売士検定
- コミュニケーション検定
- 日商簿記検定
- 色彩検定
- ウェブデザイン技能検定
- インテリアコーディネーター
- キッチンスペシャリスト
- ジュエリーコーディネーター検定
- 旅行業務取扱管理者
- メンタルヘルスマネジメント検定
- ほか

予想される進路

滋賀県中小企業団体中央会との連携協定や、国内で活躍する招聘教員の協力のもと、県内の優良企業や各種団体と密接に連携し、滋賀県内における就職が有利となります。職種については、一般企業の総合職、営業、営業企画、地域密着型企業、伝統工芸、農林水産、まちづくり、地域振興担当者、公務員などの多彩な職種が上げられます。

● 小売・卸売・商社・サービスなど ●

結家、エイブル、エルアイシー、大橋珍味堂、東匠製菓、叶匠齋庵、キヌタ、京都電気鉄道、久大家具、黒壁、嵯峨野観光鉄道、ジェアル京都伊勢丹、新木産業、セブンイレブン・ジャパン、SOU-SOU、龍崎、カタラ食品、たねや、西日本旅客鉄道、西福、仁々木、パロー、日野ゴルフ倶楽部、比良山荘、平和堂、美市楽座、楽天、良品計画、ロイヤルホームセンター ほか

● 自治体・各種団体など ●

大津市歴史博物館、草津市コミュニティ事業団、滋賀学園、滋賀県庁、滋賀県文化振興事業団、松岡学園、高島市役所、長浜赤十字病院、長浜まちづくり、比叡山延暦寺、東近江敬愛病院 ほか

● 広告・印刷など ●

アインズ、ウェブ、永昌堂印刷、エースデザイン、カブコン、京都アニメーション、ジイカイ京都、島津アトコム、東映アニメーション、トーマセ、任天堂、ピイサイドプランニング、ピーエーワークス、文芸スタアオ、宮川印刷、ユーストン、リビングアンドヘルス、レベルファイブ ほか

● 製造・建築・ディスプレイなど ●

上西産業、エンゼルプレイングカード、小川川、オプテックス、滋賀設備、新江州、島津製作所、太陽精機、タキイ種苗、TMネットワーク、夏原工業、日光精機、フジテック、本田、村田機械 ほか

※上記の主な就職先は滋賀県立大学での実績です。

学びとつながる

近江特産品トリビア 《手しごと編》

近江に伝わる手しごとの「へ〜」には、地域理解を深める学びのヒントがいっぱい!



かきが坂餅
鈴鹿市に現れる大嶽の坂餅が、比叡山の麓に伝説を受け、餅に丸たとうの伝承を持つ、餅の甲斐を懐いた、鮎、東海道土山宿の宿として、今も伝統の味が伝えています。かつて時を遡る旅人は、この餅を口に含んで、厄を避けたと言われていました。文化誌「近江学」第9号で、街道で語り継がれる餅を紹介しました。

木地盆
東近江市小坂谷では、平安時代には、地に落ちた京都の皇子が、村人に手拭き口巾着の技術を伝えたことから、木地盆や木の生産が始まったといわれています。この技術が全国へと広がり、コヤコヤなどの玩具の生産が行われるようになりました。附属近江学研究所公開講座では、小坂谷の歴史を振り返りながら、木地盆の歴史を振り返りました。

小幡人形
中山道小幡宿に産物として江戸時代初期からつくられた滋賀県産「土人形」という人形は、土人形の土人形を指します。十二支や、民話から飛び出した愛らしい土人形の風合いは、現代のゆるキャラの原点とも言えるかもしれません。附属近江学研究所の公開講座では、350年前の土人形の型を披露しました。

大津面落雁
350年の伝統を持つデザインを木型に受け継ぎ、打ち出される平菓子。表面に「U」モリス大津絵が浮かび上がっています。大津絵とは江戸時代から大津の土産物として人気のあった民画で、字が読めない庶民でもわかるように、仏教話や風刺的な話が絵になつていきます。附属近江学研究所の公開講座でその製作過程を体験しました。

穴太衆積み
比叡山延暦寺の麓、吉大社の門前町坂本で、穴太衆という石工集団が発展させた伝統の石積み技術。その技術を受け継ぐ家に伝わる家訓は、石の声を聞かせる。織田信長が認められた技術は、安土城の築城に使用され、熊本城など全国の各地に見ることができます。附属近江学研究所の文化誌「近江学」第4号で紹介しています。

Student's Column 4

僕と私と地域 新しい働き方の話

栗田明典 (地域実践領域2年)



将来の夢実現につながる実践的な学びがたくさん!

僕の地元は滋賀県高島市今津町です。祖父の実家は椋川という山間の地域にあり、先祖代々続く茅葺き屋根の家が残っています。この茅葺き屋根の家は「おっさん椋川交流館」(※おっさん〜おっさん〜ありがとう)という地域や観光交流の拠点として活用されています。秋の紅葉が美しい季節に16年続く「おっさん椋川」というイベントがあります。高齢化が大津の土産物として人気のあった民画で、字が読めない庶民でもわかるように、仏教話や風刺的な話が絵になつていきます。附属近江学研究所の公開講座でその製作過程を体験しました。

比叡山延暦寺の麓、吉大社の門前町坂本で、穴太衆という石工集団が発展させた伝統の石積み技術。その技術を受け継ぐ家に伝わる家訓は、石の声を聞かせる。織田信長が認められた技術は、安土城の築城に使用され、熊本城など全国の各地に見ることができます。附属近江学研究所の文化誌「近江学」第4号で紹介しています。

現場で様々な人とコミュニケーションをする経験から、社会への理解が深まります。4年間で培った多数の人とともに目標に向けて協力できる力は、信頼を継続できる人として評価され、一般企業でも活躍できます。

けが滋賀の魅力とは限らないのではないかと考えました。例えば京都府和東町に「ワヅカナジカン 復興プロジェクト」というのがあり、3ヶ月間滞在して地域のことを知り、交流していくということがあります。今、地域実践領域の授業で畑作放棄地になりかけた場所を地域の人々と新たな仕組みをつくりビジネスしていくプロジェクトに関わり、学んでいます。僕は「栽培、収穫、管理、販売」の一連を観光のコンテンツにできないか、つまり体験を提供するサービスを考えました。椋川は以前炭焼きをやっていた。その作業を訪れた人々に体験してもらい、交流館で地域の素材で料理した食事を提供する。そんなプログラムができないか?と考えています。椋川に日常的にアクセスしやすくなる仕組みをつくりたいです。



「おっさん椋川」のイベント会場の様子。

地域実践領域で学んでほしいあなたへのメッセージ。あなたの「学びたい」を育み、未来を彩る、個性豊かな5名の教員を紹介します。



あなたの未来を変える!

地域実践領域の教員

加藤 賢治 准教授 KATO Kenji

宗教民俗研究者。滋賀県をフィールドとして、宗教民俗を研究。現代に受け継がれてきた地域の伝承や祭礼の意義を検証し、地域社会のあり方を考える。現在、成安造形大学准教授、同大学附属近江研究所副所長。主な論文に『宮座の祭礼』〜今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状〜(2012年成安造形大学附属近江研究所紀要1号)、『寄人衆の役割に見る五箇祭』〜多様なコミュニティが結び、支える祭礼の事例〜(2017年成安造形大学附属近江研究所紀要6号)他多数。

【学位】
立命館大学産業社会学部卒業(社会学士)
佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻修士(文学修士)
滋賀県立大学大学院人間文化研究科地域文化専攻博士後期課程単位取得満期退学

仁連 孝昭 客員教授 NIREN Takaaki

滋賀県環境審議会会長、元滋賀県立大学副学長。社会システム研究者。地域と大学、環境と経済をつなぐ仕事に携わる。エコロジー・経済学、環境と調和した経済発展について研究。2000年にNPO法人エコ村ネットワークを設立し、理事長に就任。環境分野、産業分野でも活躍している。また、近江八幡の「小舟木」エコ村の実現などに精力を注ぐ。2016年4月より本学の客員教授となり、新しい大学教育創造に意欲を燃やしている。

【学位】
大阪市立大学経済学部卒業
京都大学大学院経済学研究科修士課程修了(経済学修士)
京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学

泊 博雅 教授 TOMARI Hiromasa

メディアアーティスト。1984年に設立したアーティストグループのダムタイプ(dumb type)を活動の中心として、メディアアートを研究。コラボレーションによるクリエイティブのあり方を考える。現在、成安造形大学教授、学部長。主な活動に『S/N』(1994年「アデレードフェスティバル」ゲスト)、『MEMORANDUM OR VOYAGE』(2014年「東京アートミーティング:新たな系譜学を求めて - 跳躍/痕跡/身体」東京都現代美術館)他多数。

【学位】
京都市立芸術大学美術学部美術科構想設計専攻卒業(芸術学士)
京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻造形構想修了(芸術学修士)

濱中 倫秀 准教授 HAMANAKA Rinshu

キャリア講師、株式会社コミュニティ代表取締役。民間企業での人事採用担当を経て、独立。就職支援・採用支援を中核とするベンチャー会社を創業し近畿一円及び首都圏にて様々な講座やワークショップを運営。成安造形大学においてはキャリア科目のスタート時より担当し、2016年4月より本学の教員として芸術大学に特化したキャリア教育を実践・展開。2017年4月よりキャリアサポートセンター長を務める。社会が要請する人材と未来を生かせる学生との接点に立ち、地域実践を通して生き方をデザインする方法論を考える。

【学位】
東北学院大学経済学部経済学科卒業(経済学)

石川 亮 准教授 ISHIKAWA Ryo

美術家、アートディレクター。2015年よりビバパルまるごとブランディング事業に携わる。近年は国内の神仏にゆかりのある地に向かい、その場所の持つ性質やルーツを探ることが作品制作の糸口になっている。『自然学-来るべき美学のために-』(2012年滋賀県立近代美術館)、『SHIZENGAKU』(2013年「ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ」)、『森のちから-森へ行くこゝろ』(2014年「アーティスト・イン・レジデンス」和歌山県串本町潮瀬)など、国内外での個展、グループ展多数。

【学位】
京都精華大学美術学部(現:芸術学部)造形学科卒業(芸術学)

地域実践領域の招聘教員 滋賀県の魅力を活かして活躍する人たちから学べます。

<p>秋村 洋 AKIMURA Hiroshi</p> <p>「株式会社プラネット」代表。「株式会社まちづくり大津」役員。「文化経済フォーラム」幹事。「オーガニックレストランなぎさWARM」店主。「ひとと社会も健康であり続けるために」をモットーに、生活の三大要素「衣食住」の食と建築の分野から、健康的な暮らしのスタイルが結び、支える祭礼の事例〜(2017年成安造形大学附属近江研究所紀要6号)他多数。</p>	<p>井上昌一 INOUE Shoichi</p> <p>「株式会社井上」代表取締役。「彦根仏壇事業協同組合」副理事長。近世以降、鍍金具や、彫刻、金箔押しなど高度な七つの職(技術)によって支えられてきた仏壇づくり。彦根仏壇と呼ばれた貴重な地場産業を守るため、その技術を調度品や雑貨など、次世代に息づく新たなものづくりに活かすという挑戦に取り組んでいる。</p>	<p>岩田康子 IWATA Yasuko</p> <p>「有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊園」代表取締役。非農業野菜を中心としたオーガニックスタイルのレストランを経営。食の安心、安全を訴える。かまどでおこし、お米を炊いていただくという原点にこだわり、次世代に残すべき「食」のあり方を考える。成安造形大学の教員内にあるカフェテリア「結」のオーナー。</p>	<p>川戸良幸 KAWATO Yoshiyuki</p> <p>「琵琶湖汽船株式会社」代表取締役社長。琵琶湖とそれを取り囲む山々という素晴らしい自然環境を持つ滋賀県をこよなく愛し、琵琶湖を舞台とした未来の観光のあり方を常に考える。母なる琵琶湖に抱かれて学ぶ学生たちとの取り組みに大きな期待をよせる。</p>	<p>上坂達雄 KOUSAKA Tatsuo</p> <p>「仰木地区活性化委員会」会長。大学に隣接する比叡山延暦寺の麓、千二百年の歴史と伝承が今も息づく仰木集落で生まれ育ち、稲田の保全や、仰木の風土・文化を後世に伝えている。現在、仰木地区活性化委員会の会長として仰木の人々をリードし続け、自然を愛し、健康を願い、夢をかなえる活動に取り組む。</p>
<p>林 徹 ASHI Toru</p> <p>「株式会社代表取締役会長兼海外株式会社自動ドレン」から出身し、セキュリティ分野など多岐にわたる事業を国際的に展開するベンチャー企業に成長させた起業家。一方で、琵琶湖の環境や青少年の育成に関わる社会貢献活動を熱心に行う。</p>	<p>左崎謙祐 SAZAKI Kensuke</p> <p>「有限会社 魚川」7代目右衛門。高島市旧海津港近くで1748年から続く鮎寿司の老舗を受け継ぐ。鮎寿司づくりを通して得る自然との共生のあり方を日々の生業のあり様から検証し、その手法を考える。そして、歴史、風土に裏付けられた地域文化の継承と、とりまく環境と世界観から持続可能な社会を問う。</p>	<p>富田泰伸 TOMITA Yasunobu</p> <p>「富田酒造有限公司」専務。天文年間創業の通り酒造15代目。他県産の山田錦に頼っていた酒米を、滋賀県産のみの酒米に切り替えたバイオアップ。奥伊吹山系の伏流水と、地元農家の減農薬栽培米を主に使ったこだわりの名酒「七輪米」を醸造しながら、新商品の開発を通して地域文化の発信を積極的に行う。</p>	<p>福家俊彦 FUKE Toshihiko</p> <p>「総本山三井寺」執事長。阿闍梨、大僧正。比叡山延暦寺や石山寺と並んで滋賀県を代表する古刹の一つである三井寺の執事長。三井寺は、国宝、重要文化財に指定された多くの建造物や絵画、彫刻を有する寺院としても知られ、その文化的資源を地域の活性化や、教育に活かす試みを日々続けている。</p>	<p>山本昌仁 YAMAMOTO Masahito</p> <p>「たねやグループ」CEO。滋賀県を代表し、全国に展開する菓子舗グループの最高経営責任者。「自然から学ぶ」を常に考え、2016年近江八幡北ノ庄に「ラ コーナ近江八幡」をオープン。菓子づくりを通じて人と自然の関係を結び、次世代についでいくことを目的に様々な活動に取り組む。</p>

My name is 松元悠 MATSUMOTO Haruka

地域実践領域の強い味方! 松元悠さんってどんな人?

作家活動をしています!

京都市立芸術大学の大学院で版画の古典技法リトグラフを学び、卒業後は作家活動しながら地域実践領域のスタートとともに助手をはじめました。松元さんの作品は報道やニュースをベースにしているため、事件が起きた現場へ赴き、その事件がおこるまでの人間ドラマを肌で感じ、現代に生きる人が抱えている生きづらさや、報道として流れてくるところに編集がされたしまった現実味を作品の中に取り入れています。版画は個人プレイなものづくりですが、展覧会で展示作品をつくるまえには、必ずリサーチしてからどういう絵にするかを決めています。そのプロセスは、地域実践領域のフィールドワークと通ずるものがあるそうです。松元さんは、学生の数だけそれぞれが同じ現地で違う見方をしていて、その目線のつけどころは、制作活動にも刺激になっているそうです。



「学内にある版画工房で制作しているので、いつでも覗きに来てください!」と松元さん。

いろんなシーンのアドバイザー

松元さんの仕事は、主に学生のプレゼンのアーカイブや、WEB サイトや SNS などの更新による広報活動など。そして一番に、学生の活動のサポートです。授業では学生と一緒にフィールドワークや座学にも参加。一緒に現場へ行っているため、学生から相談を受けることもよくあります。客観的な目線でのプレゼンの感想や意見を伝えるだけでなく、骨太なプレゼンになるようなアドバイスをしてくれくれます。また、学生からはものづくりの質問が多く寄せられます。これまで多数の作品を発表してきた松元さん。ものとしてアウトプットするときのアドバイスは、学生アイデアを形にするヒントになっています。またプレゼンに行き詰まったときは、他地域の事例を提示してくれるなど、発想を変えようとするヒントを渡してアイデアを広げようお手伝いしてくれくれます。



休み時間になると松元さんのところに学生が集まっています。

「地域創生を目標とした大学の授業はたくさんありますが、身近にものづくりの人がいて共同してものづくりをすることができる大学は珍しいと思います。大学の環境を活かして、周りの学生を巻き込みながら自分たち発信でどんどん新しい企画に取り組んでいってほしいです。自分が想像したことを、この大学には形にできる力がある。いろんな人を巻き込むためには伝える力が必要になってきます。具体的に実行していくのは勇気もいるけれど、地域実践領域の学生を見るとそのメンタルを着実に築いているのを感じます。卒業後、社会に出ていろんな企業を巻き込んでいけるように、みんなと並走しながら少し前を走っていけるようサポートをするので、一緒に学んでいきましょう。これから新しいメンバーが増えて、地域の可能性が広がっていくのを期待しています。」

松元さんからのみんなへメッセージ!



松元悠 オフとハロウ
1993年東京生まれ。
京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画専攻卒業。京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画修了。受賞歴に「京都市立芸術大学制作展」奨励賞(京都)2018、「アートアワードトキョー丸の内2108」a.t.m.2018三善地所賞(東京)2018。ロストック独日協会(ドイツ)、町田市立国際版画美術館(東京)に作品が所蔵されている。

Our name is ミノリブ Minoribu

楽しみながら農、食、暮らし、地域のことが学べます

2019年度で発足4年目に入し、活動の範囲がますます広がる「ミノリブ」。活動内容は大きく分けて2つ、農業班とデザインワーク班があります。2019年は地域実践領域の三輪くが部長を務め、農業色がより強くなりました。その一つが発足の年から受け継がれている、高島市音羽で有機農業を営む農家の方との連携です。今年は自分たち用の畑エリアを分けてもらい、様々な農作物の栽培を自然農法で、堆肥すら使わないやり方に取り組んでいます。3月から8月は2週間に1回、

田植えから1ヶ月は毎週草引きをしました。活動費用は地域貢献のための助成金や部費をやりくりしています。授業では味えない責任や大変さもありますが、食の安全や環境問題に直接関わっている実感が味わえます。デザインワーク班ではウェブサイトをデザインして立ち上げ発信しています。11月には大学で開催されたマルシェ(マルシェア)にミノリブとして出店しました。ここで割り当てられた畑から採れた農作物でスープをつくり、おにぎりやセットで販売。マルシェは生産者が

つくったものを消費者が直接感じられる学びの場です。形は悪くても安全で安心な野菜を食べられるのは幸せなことだと、農業とマルシェの店を通じ気づくことができます。ミノリブは生産、加工、販売を経験することができ、その価値をみんなで分かち合えるサークルです。



左|部長 三輪泰生(地域実践領域2年)・右|副部長 有澤愛希(総合領域2年)



収穫する喜びをみんなで分かち合います。



マルシェでは、「つくり手」くらし手」が価値を共有します。

Student's Column 5 僕と私と地域 課外活動の話

三輪泰生(地域実践領域2年)



これからの生き方には何が必要なのか?

僕が興味があるのは「これからの生き方には何が必要なのか」ということです。成安では授業や研究以外にそれに繋がる様々な活動に取り組んでいます。一つはアイドルグループ「てら*ばるむす」の活動拡大、もう一つはサークル活動の「ミノリブ」です。「てら*ばるむす」は京都に龍岸寺というお寺があり、そこで活動を拠点とするアイドルグループです。僕はこの活動を龍岸寺周辺にとどまらず広範囲で展開し、お寺との関わりが日常的に薄くなった今だからこそ、仏教の魅力面白く伝えたいと思っています。その手段として考えたのがミュージカルや双六ワークショップです。また「てら*ばるむす」は何よりもライブが面白いと思ったので、学術コラボ(京都市)、草津アートフェスタ(浄光寺)で実際に企画運営に

携わりました。次にサークル活動の「ミノリブ」では2019年度は部長を務めました。農業活動以外には、大津市の町家リノベーションスクールに参加し、町家のオーナーに活用アイデアを提案。時間と手間をかけながら条件を揃え、実現に向かう準備を行っています。また夏には長浜市泉貝での森林マッチングフェアに参加。2泊3日の林業体験から森林の現状を把握し、行政と民間に挟まれたジレンマなどを知る機会になりました。こうしてみると僕の活動は昔から伝わるもの、残ってきたことに興味関心が高いのだと気づかれます。便利さに流されるのではなく、自分で考えて行動し、日常生活の中から実感を伝えること、それがこれからの生き方に必要なものだと考えています。



「てら*ばるむす」のイベント運営に携わる。